



六  
花

12

2021

りっかはいくかい

雁の棹 ◎ 山田六甲

千

棹急にくづれて雁の落ちにけり  
砂に足もつれてゐたる秋の暮  
縁側の籠目に秋日ありにけり  
一葉落つ奈良監獄の塀沿ひに  
新藁の匂ひ芳し道祖神  
庭石に籠目の影を秋日かな  
秋扇畳めば蔦の実しぐれかな  
奥の院覗くはならじ紅葉裏  
秋冷の足湯に腰を寄せにけり

川音は紅葉やつれをしてゐたる  
唐揚げの紅葉弁当使ひけり  
戻りには丹の濃くありぬ紅葉橋  
川音に紅葉のほふ奥の院  
国宝の塔秋天に伸びにけり  
いにしへの行者もかくに紅葉冷  
奥の院紅葉の影の裏見たし  
育つ弟子育たぬ弟子や日記果つ  
聖夜待つ妻と葡萄酒と猫と  
散紅葉頭欠かれし石仏  
一輪の冬菊生けてある東司  
手にとれば川音の立つ実かづら  
弟子の句を選べば温し冬もみぢ  
聖夜待つフランスルロワ葡萄酒フイソウかな

## 糸瓜棚抜けてしんみりしたる風 善野行

風を擬人化して作者の心を託したのか。糸瓜の頭をごとごと打ったのを思わせるが、読者はあれこれ連想を広げ、やがて読者に還ってくるという手法。その風は糸瓜棚を揺らすために通過したとき逆に糸瓜にやられたのであろう。私は西行の出家原因をこの句に連想する。西行の出家は「あこぎの浦ぞ」と待賢門院に諭され、失恋に苦しみ仏門に旅立った（六甲の考察）のと似ている。熱く迫った佐藤義清（のりきよ・のちの西行）をぴしやりと冷やした糸瓜（待賢門院・中宮璋子）を思うのである。（一八）

※あこぎの浦とは特別の漁業区域で一般人の漁は許されていなかったが、阿漕の平治という漁師が病気の母親のために、たびたび密漁をしていて、ついには見つかり簀巻きにされたという伝説。

## 夜の秋雲は高きくに光りをり 廣畑育子

よるのあきくもはたかきにひかりおり ひろはたいくこ  
 都会の町明かりのせいで上空に光る雲に秋の近づく気配を感じた。夜の秋は微妙な季節で、どこがどう夏と違うかと言えないが、ふと秋の気配を感じるのである。それは秋を待つ心がそうさせるので、具体的な事象があるわけではない。昔から歌人・俳人が読み取った気配の題である。（一八）

初鳴 ◎ 笹村 政子

ふるさとの音の一つや鳥威  
杖つきし母の背丈に蓼の花  
口笛をたしなめられてゐし良夜  
猫じやらし撫づれば濡れてをりにけり  
揺れもせで糸瓜は長さ競ひけり  
うねるたび吹き戻さるる稲雀  
仰ぎつつずらす梯子や松手入  
桜紅葉下校チャイムの流れをり  
色変へぬ松はみどりの影敷きぬ  
初鳴とおぼしき声のかがよへり

▽鳥威の時々鳴る発砲音に驚かされるが、何日もすれば人も動物も心も慣れてくる。その音が何時しか懐かしい故郷の音になっていたのだと気づいた。都会ではない音なのだ。風水何もかも。夢風撰候補。

▽ねこじやらしの句、露が手に触れて驚いた。ああ、もう露の降りる頃になったのだと指で実感した。もとより猫じやらしは秋の季題だから、露と季重なりになるが、この句の主眼は露にぬれた指に驚いたので、猫じやらしを媒体としているが、俳句は感動や感銘を詠むのをいうのだから、露なのである。

▽杖の作品。母上の若いころはすつと立って背丈がもつとあったのに、今では腰も屈み、背丈も縮んで蓼の花と同じくらいに縮んで杖をついているよ、というのである。その背丈の基準が蓼の花であったのも、悪くはないというのだ。おそらくその蓼の花の桃色の美しい姿と母上の姿が重なっているのではあろう。

▽口笛をの作品。満月の夜、戸外で月の美しさに誘われ、気分が高揚して思わず口笛を吹いたのである鶴。そこを叱られた思い出。昔から夜、口笛を吹くと蛇が来る、などと迷信があるのは子どもへのしつけから来ているのだろう。口笛は近所に迷惑をかけるし「はしたない」とされている。ただ、迷信では済まされない理由もあるのだろうから、それを調べてみたいが、今時間がない。

▽揺れもせでの句、ユーモアを含んだ句。長さを競うというのだったら、もつと揺れてみると伸びるかも、ということなだろう。お腹がすいているのに天からパンが落ちてこないかと、望んでいるようなものと糸瓜に気合を入れているようでもある。

▽松手入の句。「仰ぎつつ」に作者と読者の実感が共有される。梯子をずらしているのは植木職人だとおもうが、家人が手伝っているとも思える。木の上を見ながらずらすことを捉えたのが佳い。

▽色変えぬ松の句。これは専門俳人の目「みどりの影」というのは心の若さである。夢風撰候補。

単衣 ◎ 志方 章子

昼寝覚こことは何処かと思ひけり  
甘かりき仏の食みしあとの桃  
風蘭の文書きをれば匂ひけり  
あの頃は夫も元氣や床涼  
夏菊を活けて淋しき仏間かな  
単衣着て母そつくりと言はれけり  
黒百合は恋の花なり歌忘れ  
平凡に勝るものなし端居して  
遊船より我が家のあたり指させる  
首痛し父の使ひし籠枕

▽**昼寝**から覚めて見ると、はて、ここはどこなのだろう？しばらく夢を見ていた場所との混沌が続く。そういうのはだれしも経験のあることで、またそういう句も多しのは否定できないが、若い時と違って年齢が重なる現実には戻るのが少し時間がかかる。昼寝をどこでしていたかにもよる。

▽**甘かりき桃**の作品。「仏が食(は)みしあと」というのが面白い。仏は供えると青硬い果物でも甘くなる。虫食いの果物はよく熟して甘い。人妻が強くて甘い香りを放つのも同じ。

▽**風蘭**は、母が昔台所の窓の外に吊つて料理のたびにお茶碗で水をやっていた。その風蘭のことを掲句によって思い返され懐かしい。章子は手紙を書いていると、ふと風蘭の匂いが漂ってきたのであろう。その高貴な香りを嗅いで、そこから手紙の内容も違ってきたのだらうと思うのである。句は「風蘭の」ので軽く切れる。蘭はことに好事家の人気植物。

▽**床涼み・夏菊**ともに夫を忍んでの作。章子の夫や兄上の死去で随分と大きな哀しみを経験した。そろそろその悲しみを脱いで、章子本来のユーモア溢れる句に戻ってもいいのかと思う。

▽**黒百合**は、「恋の歌」という句は、歌謡曲を取り込んでいる句で誰もが(昭和)を知っているフレーズで懐かしい。菊田一夫の作詞で歌詞の中に恋人「ニシパ」が出てくる。当時はアイヌ民族を題材にした歌謡曲が流行った。昭和生まれの人たちは若いころよく「すずさん」だことである。

▽**平凡**にの句。平凡とはイェール大学・スタンフォード大学の研究やマズロー心理学の観点からは、「自己肯定」を難しくしているのは「周囲の環境」と自らの「心のブロック」であることが明らかにした」という。「平凡のどこがいけませんか」と言われそうだが、平凡ほど難しい事はない。人生大波小波の繰り返しだが、その折れ線を遠くから見れば平凡な線である。小刻みの波が人生を楽しんでいる。

▽**籠枕**に寝てみると父上はなんと高い枕に寝ていたのだらう、と驚いた。枕を高くして寝られた人なのである。

木雫 ◎ 升田ヤス子

来し方を絵地図に辿る夜の秋  
夜や秋のこの耳鳴りの静けさよ  
夜の秋波のかたちに鯛素麺  
涼新た確かむ和紙の裏おもて  
庭の蔓あれこれたぐる瀬祭忌  
通信使道瀬の浦やパガジの花白く  
初鳴や框に風の通ひきて  
秋海棠水占ひの良きことば  
木雫や絡みをほどく水引草  
あかときの闇に浮く白曼珠沙華

▽雫とは、「雨に下の字を重ねてできた雫は、既にある漢字を組み合わせてできた会意文字」（『日本国語大辞典』）という。絡んだ水引草の枝に付いた露の雫が水引草の枝（茎？）をしなやかに解くのであろう。本人はその姿に秋深まる感動を抱いた。だからそれを主題に付けるのだが、本人の想いと読者の感想とはずれが多い。

▽夜の秋の句。絵地図を眺めながら来し方を振り返る。そういう気分になるのも暑さが残ってはいるが夜になるとふと秋の気配がしてのことか。今回は「夜の秋」三句。「波の形に鯛そうめん」というのが浮世絵風で佳い。だが百科事典で調べてみるとそうめん出汁に鯛の切り身を入れたものが圧倒的に多く、驚いた。私の知る限りでは「鯛そうめん」はあくまでも「魚そうめん」で鯛のすり身をそうめんのようにしたものだと思うのだが、ちがうかもしれない。故郷では鯛を出汁にしたそうめんなど食べたことがない。鯛を出汁にした汁など子どもが生まれた祝いの料理に使うくらい。そうめんの出汁には干し椎茸、イリコ、大豆などを使う。因みに来島海峡ではそうめんに鯛を入れた出汁。

▽耳鳴りの句。耳鳴りの原因はあれこれとあるが、夜の秋になると耳鳴りも静かになる（収まる）という。虫が鳴きだすと耳鳴りも紛れて気づかなくなってくるのかも。

▽涼を感じる季節になると和紙の裏表を探るほどに神経が働きたすのだろう。暑いときは裏表などどうでもいいのにと思ふのに。

▽通信使道は広島県にある瀬の浦。「パガジ」は虚子の季寄せにもある季語で、ふくべ（瓢箪）を二つに割って中身をくり抜き乾かして作った容器。韓国の時代劇によく出てくる。韓国の通信使と通わせてある句の内容。この人も多彩な表現で気持ちが若い。

月並 ◎ 藤生不二男

ひとしきりさやぎて行ける秋の風  
残照に実石榴の影濃かりけり  
水引草ひと粒づつの雨しづく  
道なきをもろ手泳がせ真葛原  
ふるさとの山は月並鷹渡る  
稔り田に風の行方の残りをり  
曼珠沙華雲を射抜ける日のありぬ  
松手入新たな空の粧へり  
海峡の月の行跡明かりかな  
コスモスに母と遊びて逝かれけり

▽秋嵐がひとしきり吹いて去ったという句。その秋風に誘われて自らの句域を広げてみたのだろうか。

▽残照（ざんしょう）とは。日が沈んでも雲などに照り映えて残っている光。夕日の光。残光導で映画の題名でもよく使われた表現に手垢のついた手帳の句（予定調和）。残照のなかの柘榴の実が影を濃くしている光景に魅力か感動をしたのだろう。ふだんの夕方にも影はあるが特に残照であることの影を見たのである。この人は新しく表現することへの勇気が薄いのだろうか。

▽水引草に雨霽が宿っている光景を写生した。雨しづくが水引の茎に沿って伝うところも想像出来る。

▽真葛が原を進むのに両手を泳ぐような仕種で進んで来たという句。普段は道もあるていど分かるが葛がはびこる秋は、藪や獣道よりもっと分かりにくい歩きにくい道なき道なのである。諷詠主宰の和田華凜さんは「夕風を真緒の芒生けて待つ」と言う句が出来た背景を「席題の中に真緒（ますほ）の芒があり幹事の方が机上の真ん中に生けてくださった。（略）その赤い芒の穂をじっと見ているうちに、この句会場が広々とした野原で、机上に生けられた芒が夕風になびく様子が脳内に現れた」と述懐している。藤生不二男の句も決して悪くはないが（虚子が、「平凡な句はとる」と言った程度の句意でやはり華凜さんのような瑞々しい作品も大切である。これは句会で培った力。

▽ふるさとの山の句。見飽きたというようなことを月並みと言ったとは思われないがわからない。月並とはありふれていてつまらないこと。平凡なこと。月次のことで変化のないことである。つまり同じ位置にとどまることで人間は常に高みへと望む動物といわれるから、六花は月並みな俳句の道なのであろう。しかし変わらないことも故郷のよろしさである。

▽コスモスの句は、誰かの追悼の句であろう。いわゆる藪（け）でこの場合公（晴れ）でなく個人的に意図が通じる）の句である。通常は前書きがある。藪（け）の句は私もよく詠む。

## 糸瓜棚 ◎ 善野 行

気の置けぬ人ありてこそ暑氣払  
海光を浴びて戻りぬ夜の秋  
夜の秋シート撫づれば日の匂ひ  
シート布く妻引寄する夜の秋  
堰噛んでゆく濁流や秋黴入  
朝夕に糸瓜見てをり生きてをり  
糸瓜棚抜けてしんみりしたる風  
齒応へのすがしき梨や雲流れ  
梨食うてまた揚々と立ち上がる  
梨ひとつ求めふらりと旅に出る

▽シート布く妻を引き寄せたのも夜の秋の所為だという。「雲抱かな春昼の砂利踏みて帰る 中村草田男」のような直情性はないが、行の句は妻がシートを引き寄せたとも取れるし、シートを引き寄せるときに夜の秋も引き寄せたとも。またシートを布く妻を見て欲情を催したとも解せられる。行が古い技巧を凝らすような句は詠むはずはないと考える。

▽秋黴入（あきついでり）の句。梅雨のように降り続く秋の雨のことで河川の水流も増えて濁流となり、堰にくると噛むように荒れ狂う。まるで龍が堰ごと噛んでいるようだと言った。水は穏やかでもあり増水すると龍のように暴れる。

▽気の置けぬとは「気を使わずにくつろげる様子、また、そのように気楽に安心して付き合うことができる関係性を指す慣用語」と辞書に。仲の良い友人がいることは人生を広げる。その人と酒を嗜むのも人生を広げるし、暑さしのぎにも俳句の促進にもなるう。

▽糸瓜棚を抜けた風が何かを失って「しんみり」していると見たのが佳い。夢風撰。

▽朝な夕なに糸瓜を見て、「ああ、生きている」と感じるのは、正岡子規が晩年糸瓜棚を見上げて日一日を必死に生きていたのを思い起こしているのだろう。糸瓜の育つ日々をみているのも生きているなあという実感。夢風撰候補。

▽梨食うてまた揚々と立ち上がる。行の人間らしさを詠む俳句は仏教でいえば大乘で、個人の世界に籠るのは小乗。他人はどうでもよく自らの事だけを気にし、自分を認めほめてくれる人に縋るのはいかがなものだろうか。そういう人でもないが、西行や山頭火、放哉のような文芸の仕事はできない。

▽梨の句。今年は私も梨に恵まれて過ごした。五十昭夫妻・出夫妻が鳥取まででかけて、子どもの頭ほどの梨を買って来てくれた。掲句の主人公も梨に旅愁を誘われたのだ。ふらりと旅に出られるのはうらやましい。私も昔夜汽車に乗って博多まで行き夜汽車で神戸まで帰ったことがある。

## 美しき爪 ◎ 住田千代子

蝉の鳴く前に箒を仕舞ひけり  
線香の灰を篩ふも盆用意  
美しき爪に破らる桃の皮  
熟桃が好きと唇拭ひけり  
横顔に幼さ残る夜店番  
妹にお面を選ぶ夜店かな  
岩肌に鎖錆び付く晩夏かな  
新涼や楽譜に加はふクレッツシエンド  
暴風の予報に寝かす瓢棚  
キャンドルは桔梗の藍古稀の卓

▽**桃の皮の作品**はなんと言つてち彼女が変貌してきた証し。美しい薄桃色の皮を残酷にも美しい爪で破るように剥いたことよ、女性の爪の残酷さを詠んだ。美しい女性の指は時に残酷で悪魔のような振る舞いをする。美しいものに潜むその恐ろしさが何とも艶冶（えんや）なのである。

▽**熟桃**が好きと唇拭ひけり。ぬぐう桃の滴りは、夜叉が人を食ったときに滴る血を連想。以前にも書いたが、鬼女が人の子を捉えて食べるので、仏はそれが罪であると論しその代わりにこれを食べよと柘榴（ざくろ）の実を与え、それ以来子どもを食べなくなつたという説話がある。ふとその鬼女を思い起こしたのである。そういう連想を読者誘導する千代子独特の作句方法である。谷崎文學ではないがそれなら私も食べられて欲しいと錯覚するにちがいない。夢風撰候補。

▽**横顔**に幼さ残る夜店番に見出したのは、何か懐かしい物を見たのか。もしかしたら事実そのような子どもが店番をしていたのかもしれない。夜店には様々な商売が来るが、一家総出で商売にはげむ。通常の子どもたちは夜店を楽しむのに、この子は幼さの残る店番だなあと同情の念も湧く。ぼくも昔村にきた、サーカスの女の子にすごく同情した。その同情が淡い恋心を芽生えさせたことも。「旅のつばくろ」

▽**新涼**とは秋の初めの涼気をいう。秋になると暑さに緩んでいた感覚が冴えてきて楽譜に、クレッツシエンドでこれからも元気で「だんだん強く」の記号を書き込んだのだ。新涼の使い方が佳い。

▽**桔梗**はきちこうとも読む。還暦の祝いの色は赤色、七十、古希の祝いには紫で祝う。その紫に因んで紫のキャンドルを卓上に飾つたが、その紫は桔梗の色であると挨拶して祝つたのである。俳人らしい挨拶。

▽瓢棚は「かくべだな」と読む。暴風の予報を受けて、事前に棚を寝かせ瓢箪を護つたのである。何事も予防準備が必要。